

[花の美術展によせて]

## 続・蓮華文様の象徴性と仏教

昨年この欄では中国仏像最初期（五胡十六国時代・4世紀）のガンダーラ風金銅仏の台座正面に浮彫りされた生花風の蓮華について、その形と意味の源流がインドの紀元前100年頃に溯るのではないかと言うこと、そして、その後の五胡十六国時代の仏像では、蓮華の描き方が簡略化されたこと、また、仏像の台座（図4）にも蓮華が採用された（連台）ことを述べました（美のたより、No.134）。

今回はその続きとして、蓮華が更に仏像の色々な部所に登場して、仏像を荘厳していることをお話ししたいと思います。

## 1. 散華・供養の花

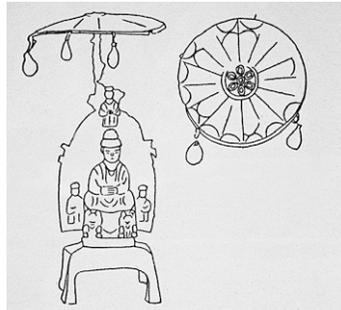
ここで先ず思い出すのはアフガニスタン北東部のショトラックから出土した石造「燃燈仏授記」如来立像（カーブル博物館蔵、2～3世紀、図1）です。五頭身に近い短軀で幅の広い堂々とした燃燈仏の真上に、太い茎のついた半開の未敷蓮華が五輪、如来に向かって頭を垂れています。如来の足下には髪を地面に敷く若者と蓮華を手にして如来を見上げる若者が異時同図法で浮彫りされています。これは、「仏伝」の冒頭のシーンによるものです。ある町にスメータという若い修業者が住んでいた

図1. 「燃燈仏授記」如来立像（部分）  
アフガニスタン2～3世紀



彼こそ前世で菩薩であり、後にゴータマ・ブツダになる人であった。スメータは町に燃燈仏（過去に出現した仏陀の一人）が来られると聞き、是非お会いして花を捧げたいと思ったが、国王が買い占めていた。丁度通りかかった娘が7本の蓮華を持っていたので、有り金全部を払って5本を手に入れた。燃燈仏が着かれ国王始め皆が散華をしたが、スメータの投げた花は空中に止まり、仏の頭光を飾った。「汝は仏陀となるであろう」と燃燈仏は予言し、喜んだスメータは鹿皮の衣と髪を地面に敷いて仏の足が汚れないようにした。花売りの少女はゴータマ・ブツダの妃となったヤショーダラーの前世の姿であった。"というのである。蓮華が仏教の花として、また、仏の頭光の花として定着する一つの説明が為されている場面で、仏への散華供養としても最もドラマチックな場面です。仏の重要な「受記」のシーンとしてガンダーラでも盛んに造られました。その中でもこの作品は最も重厚な蓮華を、光背の上縁から下げると言う巧みな手法で、話を忠実に表しています。ただ、画面の制約からか、ここでは花売りの少女は登場せず、替りにスメータが釈迦菩薩になった姿

図2. 金銅如来三尊像と天蓋 中国4世紀後半



が脇に彫られています。

もう一つ、アフガニスタンのパイターヴァ出土の石造「菩薩・供養者浮彫」（カーブル博物館蔵、2～3世紀）では弥勒菩薩を中心に両脇に並んだ子供も含めた供養者の中に蓮華の蕾を手にする男女がいます。以上の例はその後のアジアの蓮華供養図の厚形と言えます。

## 2. 光背・天蓋・蓮池の花

仏を供養する花であった蓮華は実際に仏像の光背の中に表されるようになりました。先ず始めに、ガンダーラの所謂カニシユカ王舎利容器と言われ、最近では王自身ではなくカニシユカー一世の妻子か兄弟が関与しての制作（2世紀後半～3世紀）と言われている容器（ベシヤワール博物館）の蓋飾りの中尊の頭光に尖った蓮弁が周縁を一周しています。また、インドのクシャーーン～グプタ朝（3～4世紀）の石造如来坐像（ニューデリー博物館蔵）の頭光部周縁は円弧文を用いて陽光の変形を形取っていますが、中心部には丸味を帯びた二重の蓮弁が巡っています。これに対して、再びガンダーラの3～5世紀とされ、スワート近郊ブネール出土とされる石造如来坐像（個人蔵）ではこのインドの例とは逆に頭光中心部は陽光を示す放射状で埋め、周縁部に脹やかながら先端を尖らせた蓮弁が上向きもの間に下向きものをはめ込むという珍しい形で線刻されています。

これらに対して、中国の早い例としては北魏時代の初期（5世紀初期）の金銅製如来坐像（甘肅省博

図3. 金銅如来坐像 中国5世紀



博物館蔵 図3）に見られる光背の蓮弁です。この光背は頭光部のみでなく身光部も同様の円形にして上下二段に重ねる二重円相光背と言われるもので、後に日本でも流行する形です。ここでは頭光部の内部と身光部の周縁部に浮彫りの蓮華文を巡らし、その更に外周部には波文を連続させていることに注目されます。そして、両脇に獅子を従えた方形台座の正面には前回述べた蓮華の一花が浮彫りされています。

さて、本像でユニークなのは、仏像の上に大きな天蓋を備えていることでしょうか。天蓋は光背の裏にある柄受に挿してあります。このような天蓋の源流はインド以来、貴人にさしかけた天蓋にあると言われる、インドの彫刻でもクシャーーン朝2世紀と言われる石造仏陀立像（ギメ美術館蔵）の頭光上に天蓋が浮彫りされています。さて、問題の金銅像の天蓋には中心部から大きく放射状に伸びる蓮弁を一杯に線刻し、天蓋の縁の細い垂下部には不鮮明ながら波文が残っているようです。このような天蓋を持った金銅仏の例は河北省博物館にもあります（図2）。

そして、この波文はこの像の別鑄の四脚座の脚部や正面、側面などにも一面に線刻されており、四脚座の上面には天蓋のものと同様な伸びやかな蓮弁が放射状に一巡り表されています。即ち、この仏は蓮池の中に居る仏を表し、全体として、蓮華文と波文を幾何学的に荘麗に配した仏像と言えましょう。（村田靖子）

図4. 金銅如来立像 韓国7世紀後半

